

## 論文審査の結果の要旨

平成29年7月18日

申請者：和佐田 道子

論文題目：松谷みよ子論

—児童文学・民話・自伝・小説・評論におけるジャンル混淆と女性表象—

和佐田道子学位請求論文「松谷みよ子論——児童文学・民話・自伝・小説・評論におけるジャンル混淆と女性表象——」は、従来、児童文学、民話の語り直し、小説などのジャンルごとに評価されてきた松谷を、ジャンル横断的・交叉的表現を試みた作家として捉え直し、フェミニズムの視点から分析することにより、新たな松谷みよ子像を提示することを試みた意欲的な研究成果である。

全体は3部構成となっている。

第I章「松谷みよ子が掬い上げた女性像」は、児童文学や民話の領域を中心に研究されてきた松谷の文学を、フェミニズムやフェミニズム批評の視座から再評価している。民話の再話では、柳田國男など男性中心の民話の語りでは抜け落ちていた「困難に耐え、そこを越えて行く」女性像を掬い取っている点、それまでの児童文学では描かれなかった働く母の姿や離婚問題を描いている点に着目し、こうした「山姥」や母親などの女性表象から、松谷独自の「静かなるフェミニズム」に収斂・昇華されていると結論づけている。

第II章「松谷みよ子を形成した文学」は、執筆活動の基盤となった読書経験、すなわちアンデルセン・鈴木三重吉・坪田譲治・岡本かの子・父興二郎などからの影響について丹念に辿り、のちの作家松谷を形成する源流となったものを抽出した。とりわけ父興二郎が戦前に書いたSF小説『百年後の日本』に関する原本発掘の手堅さ、および深甚な影響の解明は創見に富んでいる。

第III章「松谷みよ子文学における「死生観」」は、松谷文学を通底する「死生観」を取り上げ、エドガー・アラン・ポーの強い影響を指摘し、反戦をテーマにした連作児童文学に光を当て、聞き書きで集めた「死者との対話」に論及し、松谷独自の「死生観」を浮き彫りにしている。

以上のように、従来は、個々の作品論程度でしか取り上げられなかった松谷みよ子の文学世界の全貌を明らかにすることを試みた画期的な論文である。松谷文学全般という幅広い対象を扱ったために、論証が手薄になった側面のあることは惜しまれるが、松谷に対する童話作家という従来のイメージが一面的なものであることを確実に検証して新しい松谷みよ子像を打ち立て、従来の研究の枠組みを大きく刷新したこと等、鮮やかな独自性・先駆性を示していて、本論文が松谷研究の進展に資することは疑いなく、高く評価できる。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士論文としての水準に達していると評価し、博士の学位を授与するに値するとの結論を得たことをご報告する。

主査：人文科学研究科 岩淵 宏子

副査：人文科学研究科 北田 幸恵

副査：人文科学研究科 芳賀 浩一

副査：人文科学研究科 岡田 美也子